

令和5年7月8日(土)

信濃教育会 研究発表会 東北信B(信濃教育会館・ハイブリット)

佐伯胖所長 開会の挨拶

おはようございます。本日は、第75期研究員の皆さんの2回目の研究発表会です。6月17日に軽井沢西部小学校で第1回目の発表をしておりますので、今日は2回目ということで、充実した発表になると期待しております。

実は前回ですが、軽井沢に来る前に山梨県の南アルプス子どもの村小学校、そちらに見学に行って、そのあと山梨から軽井沢の方に来たわけです。南アルプス子どもの村小学校ってというのは、『夢みる小学校』という映画で詳しく紹介もされていますので、ご存知の方もおられるかと思いますが。いわゆる授業というものが無いのです。子どもたち自身がいろんなプロジェクトで動いているんです。ですから、教室というのは作業場なんです。いろんなものを作ったり、いろんなことをディスカッションしたり、集めた資料を読み合ったりですね。なにか、「仕事をしてる」って感じですね。そこには先生と呼ばれる人はいないんです。教員は皆さん、あだ名で呼ばれて、「仲間の一人」なんです。加藤校長は、「カトちゃん」なんて呼ばれていました。そして、そのカトちゃんの説明を聞きますと、この学校では教えるとか教わるという意識が先生にも子どもにも全くないとのこと。やりたいことをやる。ただ、それだけなんです。そして、どんどんやりたいことは、変わっていきたり、増殖したりして・・・、それで、いろんなことがどんどんできていってってわけですね。小屋ができたり、自分用の机や椅子ができたり。あるいは、発表と言っても学校内だけではなくて、あちこち行って発表してるんです。出版物も作ったりしてですね。それをまた売ったりもしてるんです。

で、そういう活動ばかりの学校だったんですけども。そういったところで、私、半日過ごして、一体この学校は何なのかと思った時に思い浮かんだ言葉が、「自由」という言葉なんです。この学校には本当に自由があるな。でも、その自由というのをどう説明したらいいかちょっと私も迷っていたんですけども、つい先日、こういう本を見つけたのです。國分功一郎さんの『目的への抵抗』という本なんです。新潮新書で、今年の4月に出た本ですけども、その「はしがき」に書いてある言葉は、「自由は目的に抵抗する。自由は目的を拒み、目的を逃れ、目的を超える。人間が自由であるための重要な要素の1つは、人間が目的に縛られないことであり、目的に抗するところにこそ人間の自由がある」と。この言葉を読んだ時に、私は、南アルプス子どもの村小学校にはなんか自由があるなって、そんな気分を持ったのは、この事だったんだなと思ったんです。もちろん、彼らも何かやろうとしたら、目的っていうのは当然あるわけですよね。でも、その目的というのは、「やりたい」という、いわば願いなんです。目的というよりも願いなんです。

で、國分さんが批判している目的は、外から与えられる目的ですよ。つまり、こうすべきである、だからこうしなきゃいけない、これを目指さなければいけないという、目指すべきことというのが与えられる。それで、この紀要（第27巻）の巻頭言で、私が「ねば／べき思考からの脱皮」ということを言っていますが、基本的にはそれと同じことなんです。でも、その國分さんが言うには、人々はその本当の自由を求めた戦いを通して、歴史が作られてきたということを書いておまして、その自由を目指す戦いというのは、まさに外から与えられるねば・べきという、外からの目的に対して抗い、まさにそれを拒み、そこからその縛りに抵抗するっていう、その中で私たちは自由というものを獲得してきたんだということを語っているわけです。それは考えてみると、先ほど申しましたように、南アルプス子どもの村小学校では、いろんなプロジェクトがありますが、そのプロジェクトは、子どもたちの願いの中で、子どもたちがやりたいということでやってるので、そこに、目標が、目的があるといえば、あるんですが、それは内側から来る願い感としての目的なんです。で、それも、参加するしないも自由なんです。ブラブラしてる子もいるし、何もしないでゴロゴロしてる子もいるんです。何をしたいかわからないという子もいるんですね。そして、彼らがやると決めたことには、ものすごく熱中してやっています。そういうね、自分で自分のやるべきことを決めていいという、そういう世界が、この南アルプス子どもの村小学校なのですね。それで私は「あ、自由があるな、ここは」という考えを持ったわけですね。

今日の研究発表会では、子どもたちがいろんなことを自分の願いに従って行動してる様子が窺えると思います。どうぞ皆様、そういったところを味わっていただければと思います。本日はよろしくお願ひします。